

イギリスにおける美術教員養成教育について

橋 本 泰 幸

Research on the Pre-service Education of Art Teachers in England

Hiroyuki HASHIMOTO

I はじめに

戦後の教育改革の際、義務教育学校の教員数を確保する目的から、各都道府県に教員養成課程を持つ国立大学ないし学部を設けることになった。この時点で教育学部美術科は、その数に応じて生まれたわけである。一方造形美術そのものを研究対象とする国公立のいわゆる「美術大学」は、現在短大を含めて7大学、私学の主なものを入れると15大学となり、進学希望者数からすれば必ずしも少なくないもののこれ等美術大学が置かれている地域は、東京8校（国立2、私立6）、京都2校（国・公立各1）、大阪1校（私立）、愛知2校（公短、私立各1）、石川1校（公立）、大分1校（公短）と片寄っている。

この事実からも教育学部美術科は美術学部美術科の役割をも負うべき性格を持っていると言えよう。しかしそれ以上に「大学における養成」という戦後の改革の理念からこの役割を負うべきであるとの考えも当然生まれてくる。

したがって教育学部美術科がこの二役、具体的には教員養成と作家養成を負ったこと自体には、問題があるとはいえない。問題は、この二役を負うことで、当該美術科が困難ではあるが非常に重要な教員養成という問題を作家養成という問題に置きかえる口実にしてしまったのではなかろうかということである。

「大学における養成」とは、大学レベルの研究の保障のもとに、教師という専門職が要求する研究と教育を行うことであろう。

しかるに教育学部美術科は、前者大学レベルの美術についての研究の保障は、制限を持ちつつも確保する努力はしてきたものの、後者教職が要求する研究と教育の保障に関して十分に努力してきたかどうかの疑問が残る。

ここでは、イギリスにおける美術教員の養成制度と教育を参考としてとりあげた。イギリスにおけるそれが、総てに優れたものであると必ずしも思えないが、日本がこれを外国から導入したことに対して、彼等は、この制度と教育を、自国の文化の中で改善と工夫をこらしつつ創造してきたのである。

例えば、大学における教員養成の考えは1970年に確立するのである。この年、大学卒業者も教師になるためには、教師資格証を必要とすると定められたのであるが、いにかえるならば、これによって専門職としての地位を獲得したといえよう。

したがってそれ以前は、教師は現在いわれるような意味での専門職として分化してはいず、教師資格証は、中等教育のみで学業を終了した者が教師になる時に、不足と思われる知識・技術を補うことで得られ、専門職を証明するものではなかった。

一方、日本においてこの理念はすでに常識となっている。しかし我々はこれを真実の形態として具体化し得たであろうか。

イギリスが過去との一線の上で養成を考え行おうとするこの発展の過程には、我国と異なるものがある。

したがって、これをつぶさに考察することで、先に述べた疑問に対する答えを探ることが可能と考えるのである。

II 美術教員の養成

1 教員養成制度

イギリスの教員養成は、大きく二つのコースに分けることができる。

一つは中等学校 (Secondary School) ^(注1) 卒業資格 ^(注2) を持つ者を対象とした、主として教育カレッジ (College of Education) ^(注3) で行う3年ないし4年間の養成コース。

他の一つは、学士号あるいはそれに相当する資格を有する者を対象とした大学教育学部 (University, Departments of Education), 教育カレッジ等で行う1年間の養成コース (Post Graduate Certificate in Education Course) である。

養成機関としてこの他に二つあげられるが、表(1)でわかるようにこれ等は上記二つのコースのいずれかを主として行っている。

	大学教育学部	教育カレッジ	ポリテクニック	美術教員 養成センター	教育カレッジ (技術)
Post-graduateコース	4,691人	4,668	7	7	
Specialistコース				665	1,248
3～4年コース	50	94,075	2,788		
その他	2,218	3,871	355	7	373
計	6,959	102,614	3,130	679	1,621
設置数	30	150	8	13	4

表(1) 教員養成機関の数と在学者数

(Statistics of Education, Teachers, 1974)

大学の教育学部では1年間の養成コースが主流であり、教育カレッジ、ポリテクニック (Poly-

technic^(注4)では3～4年の養成コースが主流となっている。美術教員及びデザイン、技術教員養成は、すでに美術カレッジ、ポリテクニク、教育カレッジ等で、美術あるいは技術についてしかるべき資格を得ている者を対象とする1年間のコースであり、レベルとしては後者に属する。

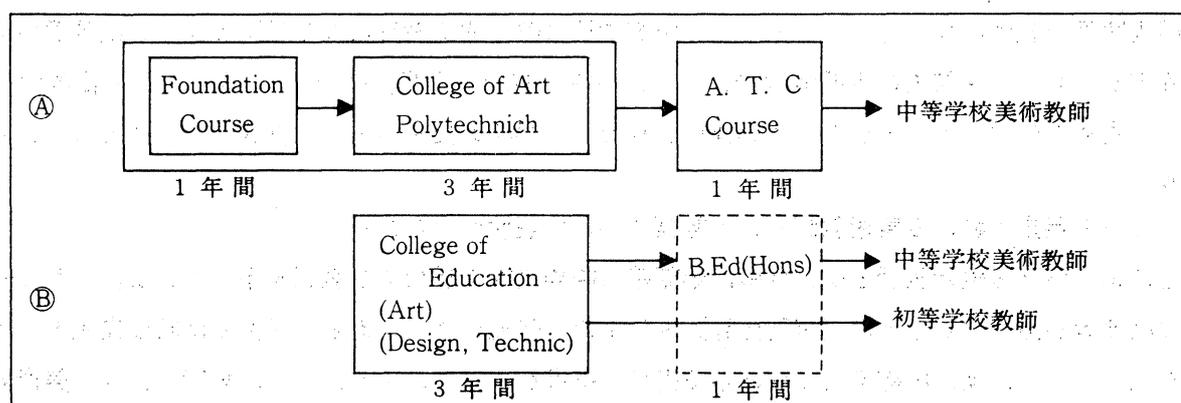
これ等の養成機関で生まれる新しい教員の内、教育カレッジ及びポリテクニク3～4年コースで資格を得た者の多くは、初等学校^(注1)、モダンスクール^(注5)、総合制中等学校で^(注5)教壇に立ち、大学教育学部等の大学卒業後1年間のコースで資格を得た者は、グラマー・スクール (grammar school)^(注5)及び私立学校等^(注1)の教師となっていく。

しかしながら、以上の様な制度の中で養成されるようになったのは比較的新しく、1974年に現在の形をととのえたのである。

教育カレッジにおける養成について述べるならば、1960年まではトレーニングカレッジにおける2年間の教育でその資格が得られていたものが、この年トレーニングカレッジが教育カレッジに変わり期間も3年間に延長され現在にいたるのである。又、大学卒業者すなわち学士号を持つ者は、私立校、公立校^(注1)を問わず教職につけたのであるが、1970年以降、公立の初等学校の教師を志望する者は、先に述べた1年間の教職課程の修了が義務づけられ、1974年には、公立の中等学校教師を志望する者にも同様の資格が必要となったのである。

2 美術教員の養成

美術関係の教員も1で述べた二つのいずれかのコースで養成されるのであるが、これについて少々の説明を加えてみる。(表2)



表(2) 美術教員養成の二つのコース

①：このコースは、いわゆる純粋美術を美術カレッジないしポリテクニクで履修した者が、美術教師を志望した時にとるコースである。

一般にイギリスの大学での修了年限は3年間であるが、美術カレッジ等で美術を学ぶ場合、1年間の美術についての基礎課程 (Foundation course) をとらなければならない、結局修了年限は4年となり、その上教師を志望する場合は美術教員養成センター (Art Teachers' Centre, 略してA.T

C.) 等で1年間の美術教師のための教職課程 (Art Teacher's Certificate Course) を履修しなければならず、教壇に立つために都合5年の年月を要することになる。図では美術カレッジと A. T. C. コースを→印で結んでいるが、これは各美術カレッジがそれぞれに A. T. C. コースを設け、卒業生の多くがそのまま入るということではない。A. T. C. コースは全国に13設置された美術教員養成センター内にあり、しかもこのセンターは必ずしも美術カレッジと直結していない。したがって美術カレッジ卒業後、学生達が職業として教師を選択した時、これ等のセンターのいずれかを選んで入学することになる。

この様に教職課程が学部の研究と完全に分離し、その上年限がかかることもあるためか真に教師を志望する者のみが集まる様である。又、表 (3) に示されている様に、25才、26~29才に第2のピ

年齢(才)	21	22	23	24	25	26~29	30~34	35~40	40~	計
A. T. C. コース	40人	165	184	77	68	93	29	9	7	672

表 (3) A. T. C. コース在学生の年齢,
(Statistics of Education, Teachers, 1974)

ークがあり、これは一定の職業経験を持つ者が入学してくると推察でき、このことからしてもこのコースが真剣な学生達の研究態度に支えられていることが理解できよう。

⑧：教育カレッジは3年制の初等学校教員養成を主目的とする教育機関である。学生達は選攻科目 (Main Subject) をそれぞれ持ち、もしも中等学校教員を希望する場合は専攻科目の教師になることができる。専攻科目に美術を選んだ学生は、週二日の美術に関する研究に平行して残りの二日間を教職専門の研究に費することで、やがて教師の資格を得、初等学校の教師あるいは中等学校の美術関係の教師になっていく。ところで中等学校の美術関係教師になる教育カレッジ出身者のほとんどがデザイン・技術の専門教師であり、いわゆる純粋美術関係は A. T. C. コース出身者によって占められていることから、この課程がやはり小学校教員を主として養成しているものといえよう。

ところで英国における美術教師という言葉について説明がいるだろう。

この地における美術教師とは、絵画、彫刻等の純粋美術を担当する教師を指している。しかし一般には彼等が担当する分野名 (専門分野) を呼ぶのが普通のようなのである。(例えば絵の先生というように) というのは、中等学校における美術科の指導が、日本のように一人の教師によって美術史を含めた全領域を指導するというものではなく、絵画・彫刻・デザイン・工芸・美術史等の分野の指導が、それぞれに専門の教師によって指導されているからである。

したがって小さなグラマースクールにも4~5名の美術関係の教師がおり、規模の大きい総合制中等学校などになると美術科の教員数は12~15名程にもなり、それぞれの教室を持ち異なる専門分野を指導している。

参考までに Kelsey Park Comprehensive school (London) の一例をあげると次の様な分野の教師がいる。

絵画(1), 版画(1), デザイン(1), 写真(1), 窯芸(彫刻)(1), 本材加工(2), 金属加工(2), 製図(1), 演劇(1)^(注6)

注(1) 就学年令による学校の分類

- i 幼児学校 (nursery school) 義務教育前の児童
 - ii 初等学校 (primary school)
 - インファント・スクール (infant school) 5~7才
 - ジュニア・スクール (junior school) 7~11才 (スコットランド 7~12才)
 - iii 中等学校 (secondary school) 11才~ (スコットランド 12才~)
- ※義務教育年限は、5才~16才、11年間 (日本6才~15才、9年間)

行政上の扱い、及び財政援助の有無による学校の分類

- i 公立校 (maintained school)
 - ほとんどの幼児学校及び初等学校、中等学校が含まれる。
 - 地方教育局 (Local Education Authorities) によってまかなわれる。
- ii 助成校 (direct grant school)
 - 私立であるが国より一定額の援助をうける。
- iii 私立校 (independent school)
 - 公立機関よりの援助はうけない。パブリックスクールと呼ばれる私立校

注(2) 学校制度の概要

3才	5	7	11	16	18
Nursery School	Primary School		Secondary School		University College of Education College of Art Polytechnic
	Infant School	Junior School	Grammar School Comprehensive School Modern School	Six form	
	Further Education				
義務教育期間					

i 'O' レベルテスト

中学卒業時、つまり16才で義務教育修了証明として

C.S.E. (Certificate of Secondary Education)

G.C.E. (General Certificate Education) — 'O' level (Ordinary Level)

の2つの試験を受ける。

G.C.E. は government control examination で C.S.E. より一段レベルが高い。生徒は能力に応じ科目数を決定する。普通は6教科目、これを獲得することが義務教育修了を意味する。

ii 'A' レベルテスト

Six form (日本の高等学校にあたる) を卒業する時、つまり18才の時に修了証明として、'A' level (Advance Level) のテストを受ける。

生徒は、進学する大学のコースに応じて受験教科を決める。平均3教科、獲得する科目数によって大学進学が決定される。

注(3)

	科目数	大 学	College of Education
'O' レベルの4の合格者	1-4	50人	220人
	5以上	160人	3,360人
'A' レベルの合格者	1	210人	5,280人
	2	4,950人	5,490人
	3以上	34,920人	2,760人

大学及び College of Education
在学生の G.C.E. 合格科目数。

1973-74年度

(Education Statistics for the U.K)

この図表よりみると College of Education
入学は、大学の入学よりある意味でやさしいともいえよう。

注(4) Departments of Education in Polytechnics

日本における高等工業専門学校に匹敵するものといえようか。

注(5) Secondary School の種類

modern school 非進学校

grammer school 進学校

comprehensive school modern school と grammer school を総合したもの。

注(6) ここでの演劇は教育のための演劇であり、体を通しての表現と考えるべきものであって舞台における演技指導とは異なる。

III 教育課程について

Iで述べた教員養成のための二つのコースの、それぞれの教育内容について紹介をするとともに、二・三の養成機関における美術に関する授業について述べてみよう。

(1) 3・4年養成コース

(Bachelor of Education (Art) Certificate in Education)

このコースは、教育カレッジ、大学教育学部、ポリテクニクに置かれており、それぞれに特色があるものの、教育内容についてはほぼ同様の構成をとっている。そのようなことからここでは教育カレッジに焦点をあてて述べてみる。

1 取得資格について

イギリス政府は、1972年に教育カレッジと教員養成制度について新たな決定を下した。一つは「教師は大学卒業者の職業とすべきである」というもので、他の一つは「教育カレッジは教員養成コースだけでなく、普通の研究コースも置くべきである」というものであった。

この結果、教師資格の学位として新たに Bachelor of Education-Ordinary (3年間), Bachelor of Education-Honors (4年間) の二つが教育カレッジ等の中に生まれた。

それまでは（現在もまだ続いているのだが）教育資格（Certificate in Education）と呼ばれる3年間の養成教育で得ることのできる資格証で教師となれた。（注、121頁10行～15行を参照）

教育期間及び教育内容の組織立ては、B.Edのそれと似ているが、このコースへの入学資格については異なる。B.Edコースが、一般に3教科以上の'A'レベル^(注2)を必要とするのに対し、Cert. Edは、5教科総て'O'レベル^(注2)でも良く、ある意味では入学がしやすかったことになる。

この様に教師の資格をB.Edに変えたことで、教職を目指す学生の学問的水準が上がることは確かであろう。しかし、これに対しこの「教育資格」のコースをなくすことが、多くの教師に適切な人々から、この職業につくための教育を受ける機会を奪ってしまうことになるとの指摘もあり、82年度をめどに廃止されようとするこのコースもまだまだ多く残っているのが現状である。

が、いずれ教員養成教育の中心は「3年制のB.Ed (Ord.)」及び「4年制のB.Ed (Hons)」の二つになるであろう。これ等の変化の根底には、教員養成を学位レベルの中で則ち、アカデミックな研究の中で行うべきであるとする考えがあり、この線にそっていくと将来その期間も3年間から4年間へと、いいかえるとB.Ed (Hons)のコースが養成の主力になるであろう。

学位の称号についてはともかく、3年間の養成ということについては不充分という声も多く、又事実一般大学出身の者は学部における専門研究3年間の後1年間の免許コースを取る仕組みになっており、ここでは4年間を要することも考えあわせれば、いずれ4年間の養成が教育カレッジの主流になっていくのではないだろうか。（現在B.Ed (Hons)への進学者はB.Ed (Ord.)学生の $\frac{1}{3}$ 弱程である）

2 教育内容の構成

B.EdのコースにしるCert. Edコースにしる、そこでの教育内容の編成のしかたはほぼ等しく、教育に関する研究と専攻とする学問あるいは芸術の二つの分野より成り立っている。そして教育関係はさらに次のような三つの分野に分かれている。

(i) 教育関係分野 (a) 教育理論

(b) Professional studies

(c) 教育実習

(ii) 専攻科目研究

(Academic or Main Subject)

これ等の分野が3年間にわたって学習されていくのであるが、イギリスにおいては1年が秋学期（新学期、9月末～12月中旬）、春学期（1月～3月）、夏学期（4月～7月）の約11週間ずつの三期に分かれている。

この中で上記の(i)と(ii)の分野が、教育実習期間（3年間で約15～16週間）を除いた残りを二分するように授業は計画されているのが一般的である。（表4参照）

月	教職専門研究(教育理論) (全日)	
火	教職専門研究(教材研究・演習・学校訪問等) (全日)	
水	専攻科目研究—必修(半日)	専攻科目研究—自由(半日)
木	教材研究 (半日)	専攻科目研究—必修(半日)
金	専攻科目 (全日)	

表 (4) University of London, Goldsmiths' College, (B.Edコース) 1年生の時間表。

次にこれ等 (i) (ii) の分野について述べてみる。

(i) 教育関係分野

(a) 教育理論

教育哲学, 教育社会学, 教育心理学, 子供の発達, 健康教育からなる基礎研究課程の終了が義務づけられており, ここで得た学問的理解をもとに Curriculum Studies, 発達段階と教育, 子供と社会, 学習と指導, 教育メディア(放送・テレビ等と子供・社会の関係等の問題)等の研究が行なわれる。(前記の基礎研究課程に対しこれを学際的研究分野と名づけていた)

これ等は, 講義, グループ討議, セミナー, 参観等の授業形式の中で研究されていくのであるが, 学生が主体となるものの方が多く, ある場合には子供達を大学に呼び学習活動を行なわせそれを徹底的に観察することで, 子供についての理解を深め同時に新たな教材を求めるという形式のものもある。

(b) Professional studies

この分野は日本の教科教育ないし教材研究あるいは技能実習と呼ばれるものにあたるといえる。学生達はここで美術・音楽・ダンス・体育等を含めた学校教科について具体的, 実際の面より研究する。この研究の性質についてモリー (Formerly Principal, Frobel Institute College of Education, London.) は次のように述べている。

「Curriculum courseは, 指導に役立つ教材を学生が得るという機会を与えるためにあるのではなく, 普通教育の中でその教材がはたす意味について理解するのを助けるために計画された Professional studiesで編成されている」 (Molly Brearley, 「Educating Teachers」)

(c) 教育実習について

一般に15~16週間行なわれている。この期間をどう3年間の中に収めるかは各カレッジで異なるが一例をあげると,

1年次—4週間(夏学期)

2年次—4週間(春学期)

3年次—8週間(秋学期)

(University of London, Goldsmiths' College, School of Education department)

のようになる。Stockwell 教育カレッジでは, 15週間を準備実習と本実習に分け, 前者を1年次

に後者を2～3年次にとしていた。

期間については以上のようになるが学生達は Professional Studies 等で学校を研究の場として使うことが多く、したがって学校そのものとの結びつきは日本の場合と比べるとはるかに多いと考えてよからう。

このように教育に関する研究は、教育現場—子供と強く結びついて展開していく。この背景に子供の成長を教育科学の立場より考察していこうとする非常にアカデミックな意識が働いている。

子供を理解することについて、実際の子供をひたすら見つめることの重要性を教えることでの教育が、結果として新しい教師像を生むと考えたのであろう。

(ii) 専攻科目研究

この分野の研究は、学生達自身によって選択されるもので3年間を通して専門的研究が行なわれる。選択される分野はその大学、あるいはカレッジの規模によるのはいうまでもない。

これは丁度日本における中学校課程における専攻科目、あるいは小学校課程の専修科目に相当するものといえる。

3 美術に関する内容

(i) Professional studies としての内容

紙、木、土、金属、プラスチック、びん、箱等の廃材を用いて絵を描く、工作する。

ここでは材料を知ること、それを用いて制作することで、材料になれることを第1段階とし、第2段階に指導学年に応じてグループを作り、その学生に対する適格な教材の発見とともに、造形についての知識、技術、道具の使用法、材料の加工法等が学ばれる。

次のものは幼児教育課程生を対象とする例である。(表5参照)

秋学期—言語と造形

春学期—絵本製作(物語・詩と絵・版画を結びつけて表現)

夏学期—木工

秋学期のみについてみると

	題 材 名	時 間	内 容
第1週	クレヨン画	時間 3	クレヨンを用いた技法の研究
2	紙彫刻	3	
3	粘土による造形	3	
4	劇遊び	3	
5～6	廃材を使った構成	6	空箱等を用いて、自動車、汽車等の動くもの、城等の建造物を作る。(写真1)
7～9	マリオネット	18	
10	展示会(評価)		

表 (5) 幼児教育コースの Professional Studiesの内容 (1年生, 秋学期)

授業は週1回、3時間で行なわれ、午後はカレッジの教師と共に小学校へ行き、造形に関する授業の参観をする(写真2)。学生達は3~4人のグループをつくり、それぞれに担当の子供を決めて、ある場合には指導を行いつつ子供がいかにして学んでいくか、どう表現するか等いろいろの観点より観察し、授業後学校教師を含めて討議する。このクラスは30人、午前の実技指導に教師は3人、午後は5人の教師が参加して行なわれる。

Junior 及び Secondary コースの学生に対する Professional studies は、Infant コースの場合と異なりデザイン、工芸を専門とする教師によって行なわれる。しかし、工芸そのものを指導するのではなく、教材研究としての工芸を指導することには変わりはない。期間は1年、1週1回、1時間半の授業。1クラス24人、教師2人、秋学期の内容を次にあげておく(表6)。なお、これらの例は University of London, Goldsmiths' College, School of Education のものである。

題 材 名	時 間	内 容
指 人 形	回 時間 3×1.5	新聞紙を利用して制作。布で服を作り完成、定形紙の利用を考える。
マリオネット	3×1.5	新聞紙を利用して制作。布で服を作り完成。
面 づ くり(写真3)	1×1.5	一枚の紙で制作。着色して完成。
壁 画 制 作	1×1.5	ポスターカラー使用。パピエ・コレ等の技法を学ぶ。
モビール制作	3×1.5	
人 形 制 作	1×1.5	紙を工夫して折る、曲げることで自由に動く立体をつくる。

表 (6) Junior と Secondary コースの学生に対する Professional studies の時間数と内容。

(ii) 専攻科目：美術の内容

ロンドン大学、ゴールドスミスカレッジ^(注1)の例をみてみよう。

専攻科目に美術を選んだ場合、その教育は美術学部の美術教育科で受けることになる。

彼等はここで1年間の造形基礎学習の後、2年次より絵画、版画、陶芸・彫刻のいずれかを選び製作、研究する。(表7を参照)

研究分野 学年	教育	美術	
4年次			B. Ed (Hons:Art)
3年次		絵画・版画 陶芸・彫刻	B. Ed (Ord:Art) Cert. Ed (Art)
2年次			
1年次		基礎学習	

表 (7) Main Subject : Art 学年と研究分野について

ここでの授業の特徴は、1年次における造形の基礎学習であろう。

美術を専攻とする学生の総てが、必ずしも美術についての準備教育^(註2)を受けているとはいえ、一年次のこの教育はそれを果たすということもあって特別の形態をとっており、重要な意味を持っているといえよう。

ここにいる教官13人の専門は、絵画、彫刻、版画、陶芸等であるが、彼等が自己の専門分野を指導するのは、2年以上の学生に対してであって1年生に対しては、スタッフ全員が協力し、造形とは何かを考えさせることから始め、造形能力及び技術を育てるという、いわば造形美術全般に亘る基礎教育を行うのである。

以下にその概略を記す。

1年次の教育内容は (i) 素描, (ii) 平面及び立体造形について, (iii) 色の学習, (iv) 美術史及び美術理論, (v) 美術館・博物館での研究で組織されており、それが次のような時間割の中で行なわれていく。

曜日	実 技	美術史・理論
水曜日	A.M. 9—P.M. 4 5時間 (自由選択)	
木曜日	P.M. 2—P.M. 4 2時間	P.M. 4.30—P.M. 6 1.5時間
金曜日	A.M. 9—P.M. 4 5時間	P.M. 4.30—P.M. 6 1.5時間

実技の授業は、木曜日、金曜日あわせて7時間が1セットとして扱われる。又水曜日は終日人物デッサンが行なわれるが、午後の授業は自由選択である。この実技について課題を学期初めより順にあげてみる。(表8)

題 材 名	時 間	内 容
素 描	回 時間 1×7	人物描写。鉛筆、筆、ペン、木炭、コンテ等使用。まげる、ねじる、のびる等一見絵にならない、ポーズを描くことで動きを確実に把えさせる。
色 の 学 習	3×7	
平面と立体の造形 (写真4, 5)	3×7	立体感覚の訓練。 平面に描いた図の部分を取りだし、それを粘土を用いてレリーフを作る。最後に又平面に写しとる。
Figur- Language	2×7	
Mesured Drawing	1×7	
色 の 学 習	2×7	
色 と 形	3×7	

表 (8) Main subject (Art) 1年次の基礎学習コースの時間数と内容。
(Goldsmiths' College, School of Art, Art Education Department)

これ等の授業は2～3人の教官によって指導されていく。そして月に一度、学生達はその期間の全作品についての個人指導 (tutorial) を受ける。

1～2人の教官によって行なわれるこの個人指導で、学生は制作上の指導を受けると共に、その他諸々の芸術一般についての話しから、その他の学科との関連を含めて一問題が話される。イギリスではこの tutorial における指導が学生の教育に対して重要な位置を占めている。

以上のような教育を経て、学生達は2年次に進むのであるが、そこでの教育は、絵画、版画等に分かれ研究を行うものでこれは美術学部の教育と基本的に変わりはない。

(iii) 専攻科目 : Design & Technology の内容

先に述べたように美術の教師になるのには、美術カレッジから A.T.C.に入るか、教育カレッジで美術を専攻するかの二つである。ところで、ここでの美術分野には、デザイン、及び木、金属その他諸々の材料に対する加工・技術については含まれない。したがってこの分野の教師は美術科とは別に Design & Technology Department で養成されることになる。この科を卒業したものは Secondary School で、metal work, wood work の教師となる。日本でいうならば、木工芸・金属工芸と工業系技術分野が一緒になった分野とでもいうのであろう。

最低必修科目をあげると次のようになる。(表9)

履習学年	教授題目	時間数	内容
1年	基礎学習	1～3期 200時間	材料についての理解, 加工法, 構成について (写真6)
1～2年 (2分野 の選択)	視覚伝達 (Visual Communication)	1～4期 80時間	
	デザインと技術の歴史	1～4期 100時間	
	材料—科学と技術	2～4期 100時間	
2年	一般デザイン研究	1～3期 200時間	
3年	特別デザイン研究	1～3期 200時間	
4年 (B.Ed. Hons)	上級デザイン研究	1～3期 200時間	
	デザイン・テクノロジー科に 開設されているものを選択	70時間以上	

表 (9) (University of London, Goldsmiths' College Design & Technology Department)

ここでの授業は、一つのテーマに対し二人ないし三人が、それぞれ専門の立場より分担して教育を行う方式をとっている。

例えば基礎学習で自然形態をもとに一つのフォルムを創造する授業の場合、計画と制作に分かれるが、それぞれ異なる教師、クラフトの教師と Metal Work を専門とする教師によって指導される。いふなれば各教師それぞれの専門知識・技術を一定の教育テーマに沿って教育していくという方法である。

〔2〕 1年制美術教員養成研究科コース

(Post Graduate Certificate in Art Education)

先に述べたようにこのコースに学ぶ学生は、すでに美術カレッジ等を卒業している。つまり美

術についての専門課程を修了している者を対象としていることから、A.T.C. (Art Teacher Training Centre)での教育は、教職課程のみで組織されているといえる。

したがって教育課程の多くは1) 教育 (curriculum studiesを含む)、2) 教育実習から成っている。が中にはこれに学生の制作活動も教育課程の中に位置づけているセンターもある。

Goldsmiths' カレッジの場合は後者を取る。具体的内容を以下に述べる。

1 教育研究

心理学的、哲学的、社会学的等の観点より教育を研究し、さらにそれを美術と結びつけ美術教育の目的、目標、教師の役割等についてが研究される。

このコースには50人程度の学生が在籍していたが(1977年)、彼等は研究分野に応じて10人前後のグループに分かれている。

授業は全員の参加する講義、あるいは討議と、グループに分かれての研究の二つの形で進められていく。

全員が参加する授業は週1回、3時間が設定されているが、これには全教師(12人—哲学、社会学、art therapy 各1人、絵画6人、彫刻2人)も出席し、スライド、フィルム等を用いた講義の後に彼等を含めて討議による研究形式をとる。一方グループ学習は、特に決められた時間になく、教育実習を通して常に行なわれていく。

2 教育実習

1年間、つまり秋・春・夏学期を通して週三日間が教育実習にあてられる。

このコースの授業日数は約150日。そのうちの90日が教育実習にあてられ、この間学生達は secondary School です。

一般に大学教育学部や教育カレッジに附属の初等、中等学校はなく、実習生は大学区内の公立校で実習を行う。

要請を受けた学校側は、特別の支障のない限り受け入れを承諾する。したがって学生達はこの間に Grammer School, Comprihensive School あるいは男子校、女子校と種々のタイプの学校を経験でき、さまざまな角度よりの研究が可能となる。

このように長期の実習が、附属校でなく一般校で行えるという背景に、教員養成に対する社会の理解があることを感ぜざるを得ない。

3 制作活動

学生達は各自のテーマに添って絵画、彫刻、版画等の制作を行う。彼等はすでに美術カレッジ等で制作に関する知識・技術を身につけており、ここでの制作研究は、ほぼ自主的に進められていくのであって、教師による指導という定められた時間は設けられてない。

以上三つの分野で教育内容が組織されているが、重要な位置を占めているのは教育実習であろう。授業日の60%を学生達は実習校です。このことから彼等の研究が総て実習を通して行なわれると考えてもよからう。教育に関する、美術教育に関する題目が、学生に生きた問題として扱われ、このことが結果としてこのコースでの研究を活気づけ充実させていくのである。

注(1) University of London, Goldsmiths' College

1) School of Art Art Education

Art Education (A. T. C.)

Art history

Ceramics

Embroidary & Textile

Fine Art

Foundation studies

Visual Communication

2) School of Education

Advanced studies in Education

Design & Technology

First School Education

Middle School Education

Nursery Education

Secondary Education

Post Graduate Course

Physical Education

この他3つの School を持つ。本論関係学科には下線をつけておく。

注(2) Foundation Course

Art College, Polytechnic 等に進学する美術についての1年間の準備課程

VI ま と め

1 広義と狭義の教職課程

戦後の教育改革において、日本の教員養成制度は、根本的に改められた。そこでは従来の師範学校での養成が廃止され、教師は原則として四年制の「大学」において養成されるべきであり、しかもその養成は特定の大学に限られないという、いわゆる「開放制」の原則をあわせもつ制度に変わった。すなわち教育職員免許状取得に必要な教育課程—教職課程—を用意する大学において、教員が養成されるようになった。

ところで、この教職課程が含む範囲の限定から二つの見方が生じた。

一つはこの課程が「一般教養」、教科担当に必要な「専門教養」、それに教育原理、教育心理、

教育実習を内容としてもつ、`教職専門`の三つの分野から成るという考えである。

他の一つは、以上の三つの分野のうちの教職専門のみをもって成立する、という考えである。

これについて文部省は、前者の立場をとっている。これが結果において開放制の原則に矛盾するものであるとの指摘もあるが、現実には、全国教育大学及び大学教育学部の教育課程は、この立場に立って編成されており、これらの大学・学部は教員養成大学として位置づけられている。

したがって日本の大部分の小・中・高等学校教師が、広義にとらえられた教職課程の中より生まれている。他方、全体としての割合は少ないが、上記外の大学・学部に籍を置く学生が教職を希望する場合のように、狭義の教育課程の中で、つまり学部教育プラス教職専門科目のみで教員免許状を得る者もある。

このように二種のコースの中で、日本の教師が養成されてくるのであるが、それぞれに現実的意味において問題を持っている。

それは、広義の解釈をとり、目的大学として位置づけられた教員養成大学・学部においてすら、いまだにこの目的を果たすべき見解が、先の三つの学問分野間に成立していないことである。したがって相互に特別の関係を持つことなく、それぞれの教育を展開するというもので、養成教育なる実態は、学生がそれらの学問をうまく調和させた時に、はじめて学生のうちに成立するものであるといえよう。

狭義の場合でいえば、これが`つけたし的、性格しか持ち得ていない`という点である。そして、この両者に共通していることは、全体としてその中に`教師を養てる意識、と`教師になる意識、とが非常に希薄なことであろう。

2 教育カレッジの教職課程

この点についてイギリスの現実を見てみよう。

ここでははっきりと異なる点は、教職課程一養成コースが他の教育コースと分離、独立していることである。

教育カレッジは、教員を養成するという目的を持っており（1972年より教員養成を目的としないコースも置かれるようになる。例、Bachelor of Art, Bachelor of Humanities）、この意味では教職課程が広義の立場をとるのであるが、実際の性格は狭義のそれである。

すなわち、専攻科目（Academic or Main Subject）、Professional studies、教育（理論と実践）という分野が教育課程を形成しており、これを教職課程として把えるならば、広義の解釈の立場に等しいのであるが、日本の場合と異なり、ここには`子供の教育、についての研究の場である`という共通理解が各分野間にある。

学生達は「教育」の分野でこれを理論的に、「Professional studies」では、教育現場に一層接近した観点より教材の研究を、「専攻科目の研究」で自分が専門として選んだ研究を行う。そしてこれらの研究を背景にしつつ教育実習という実践を行い、その中でさらに新しく研究の観点を求め

ていくという方法をとるのであるが、ここでは各分野が、**教師になるためだけの教育**ではなく**子供の教育**、というテーマのもとに、それぞれの教育を展開しているのである。

したがって、これらのカレッジの性格は**教師とは何か**、**子供の教育はいかにあるべきか**、を学問的見地及び実習の中で求めるというものであって、その結果が**教師を養成**、しているのである。

卒業者の大部分が教師の資格を得その職につくが、彼等の内には、**子供の教育**、についての専門家であるという意識がたしかにある。

このことは、Post Graduate Certificate in Education コースの学生についても同様である。

すでに学士号を持つこのコースの学生は、大学で学んだ自分の専門研究を**子供の教育**、に結びつけるべく新たな研究に取り組んでいる。

彼等は1年という期間の大部分を教育実習に費すのであるが、それが単なる教師訓練の場にならず、学生達の自発的研究の場になっているのは、彼等をささえる教師という専門性への学問的探究心であろう。

このように固有の専門性を求めるカレッジ及びコースである故に、他の大学・学部と分かれて存するのである。それは他の大学・学部がそれぞれ分かれているのと同じ理由であろう。

ここには、**教育を考える**、**教師を考える**、**子供を考える**、—美術の場合でいうならば、**美術と教育**、**美術と教師**、**美術と子供**にいて考える—という自覚的意識が、**教官・学生相互の間**にあり、これが訓練の場としてではなく、**研究の場として教育カレッジ**を考える基盤になっているのである。

3 professional studies と実習

これが最もきわだって感じられるのは、Professional studies と教育実習であろう。

Professional studies とは先に述べたように、**学校教科の教材**を研究するものであり、ここでは**学問と子供**を教育学の見地より結びつける**教育材料**が研究される。

美術科の場合で述べるならば、**土、木、紙、金属等**を用いて、いかなる造形活動を、いかなる目的で子供に行なわせるかを考えるのが、**具体的課題の一つ**になろう。そのために学生は自ら、**素材体験**を深める実習を行う。

彼等の造形経験は浅く、そのためこれらの授業は、ともすると単なる練習として受けとられ、低調になるのであるが、ここでは**教官**、**学生の結びつき**が先のような意味で固く、したがって**実践的研究の場**としての性格を持ち得ている。

また、教育実習について述べるならば、まずその期間の長さをいわなければならないであろう。**教育実習及び学校訪問**は、**子供の教育**を考える場合、**必要な視点**といえようが、あわせて**教師**を考える、ことでも不可欠のものでもある。これが**教育課程**の中で非常に大きな割合を占め、しかも**充実したもの**として運営できる背景には、**教師の専門性**についての理解が、**教官**、**学生**、そして

実習協力校、すなわち社会全体に深く定着してきていることを意味しているのであろう。

V お わ り に

養成に関して、制度としては日本のそれとそれ程の差異はないものの、教師を把える意識の差は大きいのではなかろうか。

日本においては、大学における養成、と開放制、という二つの原則の中で教員養成はゆれ動き、未だに確とした意識と学生を育てる土壌を形成し得ていない。

私もまた、教師という職業が厳しい専門性を持つと考えている。美術教師の場合でいうならば、発達・心理を含めた子供の理解と芸術の深い研究の上で、この二者を教育の観点より適切に結びつけることのできる知的技術を有することが、美術教師の専門性といえよう。

この知的技術養成のために現在の問題から着手するならば美術教員養成コースと美術家養成コースを、はっきり分けることが必要であろう。そしてその上で美術科を、中学校課程、小学校課程の枠にとらわれることなく、美術教師あるいは美術教育を志す学生すべての造形美術研究の場として編成しなおすことが必要であろう。

また、これにあわせて、教育実習を含め学校現場と緊密な関係を持つ研究の機会を殖やすべきであろう。

すでに述べた様にイギリスでは、A.T.C.コースが教育期間の60%、3年制養成コースが17%を実習期間にあてており、またこの他にも学校現場で研究する機会を常時持っている。これに対し日本では、教育学部の学生が主免、副免を取ったとしても実習期間は、全授業日数の6%にすぎない。

教育現場と結びついた研究の機会を殖やすとは単に教員の準備教育として実習期間を長くすることではない。子供、教育そしてそれにかかわる教科（美術科では美術）を科学的に研究する教科教育の実践的研究の場としてそれをあてたいのである。

それぞれのコースの目的が明瞭にされ、上記のような編成が行なわれれば、結果的に美術科の中に美術教師の専門性を求めるという学生・教官両者の意識に支えられた共通の場が生まれ、同時に教師についての真の追求が可能になるといえる。

美術教師が美術家と異なる専門性を必要とするという自覚のもとに養成教育を考えない限り、実体を生み出すことは不可能であろう。

(1978年10月16日受理)



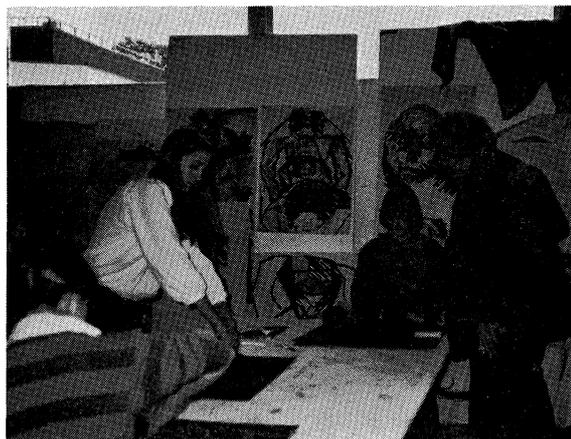
写真(1) Infant Course の Professional Study
の授業風景



写真(2) Nursery School における参観授業
と学生による指導



写真(3) Junior & Secondary Course の
Professional Study の授業作品



写真(4) Main Subject : Art の授業風景
平面と立体造形



写真(5) Art Education Department の
アトリエの内部



写真(6) School of Education, Design &
Technology の授業風景

(University of London, Goldsmiths' College, School of Education)